

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 39

* カルヴィーノとフェノーリオ *

堤 康徳

2022 年は、作家ベッペ・フェノーリオ (Beppe Fenoglio, 1922-63) の生誕 100 年にあたる。フェノーリオの生地アルバでは、誕生日の 3 月 1 日から 1 年間にわたり「ベッペ・フェノーリオ 22」と題されたさまざまな催しが開かれるようだ。

フェノーリオの代表作『個人的な問題』と『アルバの二十三日』(いずれも、楠瀬正浩訳、バジリコ株式会社) が昨年あいついで翻訳発行された。レジスタンス文学の傑作が日本語に訳された意義は大きい。まさに快挙というべき訳業である。



じつは私も、1980 年代半ばにフィレンツェ大学に留学したさい、イタリア近現代文学が専門の指導教官ジョルジョ・ルーティ教授 (Giorgio Luti, 1926-2008) から、レジスタンスにかんするイタリ

ア文学を日本に紹介するなら、フェノーリオの『パルチザン・ジョニー』を訳してはどうかと薦められたことがある。さっそくこの長篇小説 (*Il partigiano Johnny*, Einaudi, 1984. 初版は 1968 年刊) を購入したものの、英文まじりのその独特の文体に二の足を踏み(フェノーリオは英文学の愛読者として知られ、彼の作品には、英詩からの引用、英語表現が頻出する)、残念ながらいまだに師のアドヴァイスを実現できずにいる。

フェノーリオは、同世代のカルヴィーノから高く評価された作家のひとりである。フェノーリオの死後に出版された『個人的な問題』(*Una questione privata*, Garzanti, 1963) について、カルヴィーノは次のように述べている。

私たちの世代が待ち望んでいた本が今ある。ここに私たちの仕事が完成し、意味をもつことになった。今初めて、フェノーリオのおかげで。ひとつの季節が完結したともいえるだろう。今初めてそのような季節が存在したことを私たちは確信できる。「『蜘蛛の巣の小道』から『個人的な問題』にいたる季節が。

『個人的な問題』は(中略)、『狂えるオルランド』のような、愛の狂気と騎士の追跡の物語に特有の幾何学的な緊張によって構成されている。また同時にここには、その内側においても外側においても、ありのままのレジスタンスが存在する。かつて書かれたことのない信憑性をもって。それは、忠実な記憶力によって何年も

のあいだ明瞭に保存されてきたものである。
(中略)

私が序文を書きたかったのは、このフェノーリオの本であって、自分の本ではない。

(Italo Calvino, *prefazione a Il sentiero dei nidi di ragno*, Torino, Einaudi, 1976, p. 22)

この文章は、1947年の長篇第一作『くもの巣の小道』が64年に再刊されたさいに、作者カルヴィーノが付した自序の一節なのである。カルヴィーノのフェノーリオにたいする最大限のオマージュに驚かされる。ネオレアリズモ文学の傑作と評される『くもの巣の小道』をカルヴィーノが書いたのは、『レジスタンス文学』を創造することがまだ開かれた問題であり、『レジスタンスの小説』を書くことがひとつの命令として課せられていた時代だった。パルチザン闘争を経験したカルヴィーノにとってレジスタンス文学は、レジスタンスを誹謗中傷する者たちへの挑戦であると同時に、それを聖人伝のようにみなす者たちへの挑戦でもなければならなかった。そこから紡ぎ出されたのが、「ひとりも英雄がおらず、誰も階級意識をもっていないパルチザンの物語」(*ibid.*, p. 14)、すなわち『くもの巣の小道』である。河島英昭によれば、「1950年を境にした数年間は、たしかに洪水のごとく抵抗運動や解放運動の体験小説(悪しきネオレアリズモ文学)が発表された」(「イタロ・カルヴィーノについて」『まっぴたつの子爵』所収、河島英昭訳、晶文社、2006年、p. 184)。この時期のレジスタンスにかんする小説の多くは、おそらく体験小説の域を出るものではなかった。フェノーリオの小説をのぞけば、『くもの巣の小道』出版から十数年の歳月が流れ、カルヴィーノは気づく。自分が意図したパルチザンの物語を、おそらく自分以上に表現しえた作家がいることに。また、自らがその担い手だったレジスタンス文学が、確実に別の作家へと継承されていたことに。

ベッペ・フェノーリオは1922年、ピエモンテ州南部の町、アルバに生まれた。アルバはピエモンテ南部の丘陵地帯ランゲの中心に位置する町である。フェノーリオの創作の主要舞台は、彼の故郷であるこの一帯にほぼ限定される。わずか40歳で病死したフェノーリオの作品の多くは死後に出

版されている。

トリノ大学文学部在籍中に徴兵されたフェノーリオは、1943年9月8日に連合軍との休戦協定が公表されたとき、イタリア王国軍兵士としてローマにいた。9月9日未明、ドイツ軍の攻撃を恐れた国王と首相のバドリオ元帥は首都ローマを捨て、南部の港町プリンディシに逃れた。イタリア軍は命令・指揮系統を失って混乱に陥った。同じく9日、連合軍がナポリ南東のサレルノに上陸し、サレルノ以南を占領下に置いた。ナポリ以北はドイツ軍の占領下に置かれた。イタリアのレジスタンスは1943年9月8日に始まる。休戦が公表されたこの日から、1945年4月25日までの、ドイツ占領軍とファシスト政府からの解放を目標とする抵抗運動である。レジスタンスを指導したのは、9月9日、反ファシズム諸政党が結成した国民解放委員会であり、武装闘争の担い手となったのが、パルチザンである。

フェノーリオは、休戦協定が公表されてまもなく帰郷し、1944年以降、レジスタンスに身を投じた。最初は共産党系パルチザン部隊に、その後バドリオ派(国王とバドリオ元帥を支持する勢力で、国民解放委員会に属さないため独立派とも呼ばれる)のパルチザン部隊に加わった。パルチザンとしての決定的な体験が、フェノーリオ文学の母胎といえるだろう。

『個人的な問題』に主人公ミルトンの休戦協定公表後の行動が記された箇所があるが、そこにはフェノーリオ自身の体験が投影されているのかもしれない。ローマを後にしたミルトンは、1943年9月12日、リヴォルノにいた。彼はローマを離れて3日間何も口にしていない。駅の便所で空腹と悪臭のため気絶しそうになったとき、ジェノヴァまで列車に乗せてくれることになる機関士に出会ったのだった(邦訳書、pp. 28-29)。ミルトンは、トスカーナの港町リヴォルノからジェノヴァまで列車でリグリア海沿いを北上し、そこからピエモンテに向かったのだろう。

『個人的な問題』には、パルチザンとファシストとの凄惨な内戦のありさま、闘争の生々しさと不条理、そのむきだしの暴力が、むしろ淡々とした筆致で描かれているが、物語の主筋となるのは、主人公ミルトンの、レジスタンスとは無縁のきわ

めて個人的な関心と、それを解明するための命がけの冒険である。ミルトンは、親友のジョルジョから紹介されたフルヴィアに思いを寄せている。ところが、ミルトンが徴兵されてアルバを離れてから、ジョルジョとフルヴィアが頻繁に会っていたことを知る。ふたりは恋人どうしなのではないかという疑念が頭から離れない。真相を確かめるためにミルトンは、いったん部隊を離れ、彼と同じくパルチザンとなって別の部隊で戦っていたジョルジョに会いに行く。しかしジョルジョは、この土地特有の濃霧のなか敵に捕えられたことがわかる。ミルトンは親友を救い出すため、捕虜交換の要員として敵の軍曹をとらえるが、逃亡をはかったこの男を撃ち殺してしまう。ファシスト側はその復讐として、パルチザンの伝令だった少年捕虜を銃殺する。ジョルジョとフルヴィアの本当の関係が不明のまま、ミルトンも最後は敵の銃弾に倒れる。

ミルトンは、自らの個人的な問題に決着さえつけられれば、これまで苦楽をともにしてきた仲間たちと再び行動をともにできるはずだと考える。「もう一度、仲間たちのために、ファシストを相手に、自由のために、何かすることできるだろう」(同書、p. 44)と。自由のための戦いという大義よりも私的な問題を優先させてしまったことへの後ろめたさを感じながら、ミルトンは自らの行動をこのように正当化したのだった。

短篇集『アルバの二十三日』(*I ventitre giorni della città di Alba*, Einaudi, 1952)は、カルヴィーノの『まっぷたつの子爵』と同じく、エリオ・ヴィットリーニが創設した「イ・ジェットーニ (I gettoni)」叢書の一巻として、同じ年に出版された。『アルバの二十三日』には 12 の短篇が収められ、その半数がランゲ地方におけるパルチザン闘争を、残り半数が、戦後の市民生活の一端を題材としている。表題作は、1944年10月24日にアルバ市の占拠に成功したパルチザンが、同年11月2日の「死者の日」の祭日にファシストに奪還されるまでの経緯を克明に描き出す。

フェノーリオの作品からはいずれも、たしかかな手触りをそなえた故郷ランゲの風土が読者の前に現れてくる。ミルクの海のような濃霧、豪雨によるターナロ川の氾濫、そして丘陵地帯に広がるブドウ畑……。短篇「パルチザン・ラウールの門出」

(*Gli inizi del partigiano Raoul*)には、ブドウの農薬として散布される硫酸銅の容器を標的にしたパルチザンの射撃訓練(?)のようすが書かれている(邦訳書、pp. 68-69)。短篇「ペテン」(*Il trucco*)には、農民たちが自らの畑をファシストの処刑場所にされることを好まないというパルチザンの発言があった(同書、pp. 57-58)。自らの生活の糧を生み出す大地が、たとえ敵のものであっても人間の血を吸うことを忌避したいという感情は、農民でなくても理解できるような気がする。

ミルトンに思いをはせながら、彼の足跡を私もいずれは自分の足でたどってみたいと思う。命がけの彼らの移動とはまったく正反対の気楽なトレッキングではあるけれども、ミルトンの所属する部隊は、アルバから東に直線距離でおよそ 4.5 km離れたトレイゾ村に駐留していた。ジョルジョのいるマンゴ村はトレイゾからさらに東に 4.5km。標高差は約 100m。ミルトンは、登りの道のりを一時間歩いてマンゴに向かったのだった。いったいそこにはどんな風景が広がっているのだろうか。

ランゲー帯はワインの名産地として知られるが、アルバは白トリュフの産地としても有名である。パンデミックが収束し、それを味わう日が一刻も早く来るのを願うばかりである。



(上智大学准教授)

イタリアあれこれ①

「イタリア語、どうやって勉強したんですか？」

杉 栄子

私がイタリア語の勉強を始めたのは大学1年生の時。親友に誘われてなんとなく、であった。彼女はファッション好きでイタリアのブランドなどよく知っていたが、私はそういうものに疎く、イタリアと聞いてかろうじてスパゲッティをイメージ出来る程度だった。そんな私が、今ではイタリア語を使って、講師や通訳案内士の仕事をしている。当連載では、自身の経験を元に、イタリアの様々なことについて書いていこうと思う。

私がイタリア語を教え始めたのは2002年だったと思う。その前年3月から日伊両政府によるイタリア紹介事業「日本におけるイタリア2001年」が展開され、約1年に渡って、日本全国でイタリアを紹介する様々な催しが開催された。それをきっかけにイタリアに興味を持った人もたくさんいたことだろう。

イタリア語を学ぼうとする人も多くて、当時は20名のクラスもあった。今から思うと隔世の感がある。隔世の感と自分で書いてみて、あれから20年も経っていることに、細々ながらもよく続けてきたものだとして少々驚いている。こうした節目にコレンテ寄稿のお話を頂いた。正直なところ戸惑ったが、20年を振り返ってみる良い機会になるかもしれないし、何より白羽の矢を立ててくれたことをありがたく思い、お引き受けすることにした。

というわけで記念すべき第1回目の寄稿、何を書けば良いだろうかと考えて、この20年でよく質問されたものの授業中は時間の都合で詳しく答えられなかったことについて書いてみようと思う。

それが、タイトルの「イタリア語、どうやって勉強したんですか？」である。

イタリア語を勉強し始めた頃は、色々な名詞や動詞の活用をひたすら暗記したのだが、いわゆる単語カードは使わなかった。カードの表面にイタ

リア語、裏面にその意味など覚えたいことを書いて、束状にまとめてあるアレであるが、私は苦手だった。中学か高校で、英単語を覚えるために単語カードの束を作ったことはあるのだが、作った段階で満足してしまい、それを見返すことはなかった。根が面倒くさがりの私にとっては、暗記の作業に入る前の準備が多すぎたのだ。それ以来、単語カードを作ることはなく、何か暗記しなければならないことがあると、声に出すか、チラシなどの不要な紙の裏面に何度も書いて覚えた。後から見返すものではないので、読めないような乱れた文字で書き殴っていた。暗記のメカニズムについて詳しいことは分からないが、「読む」「聞く」といったインプット作業だけで暗記しようとするより、「書く」「話す」といったアウトプット作業をした方が記憶に定着するというのが経験上の実感である。

そうやってイタリア語を学び始めたのだが、英語と比べて覚えることが多かった。まずは7つもある定冠詞。なかなか覚えられず、il l' lo la l'.. il l' lo la l'.. と、まずは形だけでも覚えようと呪文のように何度も声に出したものだ。次に動詞の活用。六通りの主語に応じてほぼ全ての動詞が六通りに変化する。慣れてしまえばどうってことないのだが、最初は面食らった。不規則活用をする動詞も多く、辞書を引いて調べるしかない。今では便利なアプリや電子辞書があるが当時はまだなかった。緑色の伊和辞典をめくって探したものだ。

少し脱線するが、紙の辞書はいいものだ。目的の単語を探しながら、他の単語が目に入ってくる。こんな言葉、こんな表現があるのかと、思いがけない発見が楽しかった。長距離で移動しなければならない時は辞書を持ち歩き、電車やバスの中で適当なページを開いては読んでいたことが懐かしい。

さて不規則動詞の活用が知りたければ、辞書の後ろの方に掲載されている活用表を見ることになるのだが、essereの活用表を初めて見た時は呆然としてしまった。essereだけで1ページまるごと使っている。現在形の六通りの活用を覚えるだけでも大変なのに、法や時制によってこれほど活用も変わるのか、これを全て覚えられるのかと、途方に暮れたのだが、チラシの裏に書き殴る作戦でなんとか覚えた。と言っても、一度暗記すればずっと

覚えていられるわけではない。放っておけばどんどん忘れるので、何度も辞書をひき、何度も声に出し、何度も書いた。



【留学したボローニャの街並み】

基本的な文法を学び終わると、長文読解の練習に移行した。最初に読んだのは、イタリアの中学か高校で使用しているとおぼしき歴史のテキストだったと思う。もちろん初めて見る単語ばかりが並んでいるので、一語一語辞書で調べるのだが、目的の単語になかなか辿り着けなかった。

動詞は不定形で辞書に掲載されているので、例えば、*invase* を調べたければ、不定形 *invadere* を探さねばならない。しかし、初めて見る *invase* の不定形なぞ知るわけもなく、それどころか、*invase* が動詞なのか名詞なのかという区別もついていない状態なので、まずは *invase* そのままで探して見つからないという羽目になる。(今では辞書アプリで *invase* と入力すると、すぐに *invadere* の直説法遠過去3人称単数と表示してくれる。なんて便利なのだ)。 *invase* では載っていないとなると、次にやることは、語尾を *-o* あるいは *-a* に変えて

探してみることだった。名詞なら単数形、形容詞なら男性単数形で辞書に掲載されているので、その形に戻してやるのだ。そうやって *invase* の項目に *<invadere の過去分詞>* という説明を見つけ、ようやく目的地 *invadere* に行き着く。こういった具合で単語を調べていくのだが、その目的地が間違っていたと後で気付くこともしばしばあって、辞書を引きなおしたものだ。

基本的な文法知識と、シンプルな構造の文章なら読めるというイタリア語レベルで、私は大学3年の時にボローニャに1年間留学した。それまでイタリアに行ったことがなく、数えるほどの会話経験しかなかったのが、最初は現地のイタリア人が何を言っているのかさっぱりわからなかった。語学学校の授業では、教材に書いてあることはわかるのに、先生やクラスメイトが言っていることは聞き取れなかったのが、とにかく耳がイタリア語に慣れていなかったのだと思う。少しずつ聞き取れるようになって、その後、大学の授業に出始めたのだが、こちらはこちらで全く内容についていけず、講義を録音したり、ノートをコピーさせてもらったりと、色々試みた思い出がある。

ところで、私が初めて最後まで読み切ったイタリアの小説はジョヴァンニ・ヴェルガの *I Malavoglia* (マラヴォリア家の人々) だった。250 ページほどの長編で、全く授業についていけない私を見かねたイタリア人の教授が、イタリア語上達のために勧めてくれたのだ。

1割も聞き取れていなかった講義は一旦脇に置き、私はあるだけの時間を使ってこの小説を読むことにした。先ほど書いたような要領で、単語を辞書で調べつつ、この活用なら主語はこれだな、この形容詞は語尾が女性形だからあっちの名詞を修飾しているのだな、などと考えながら文章の意味を取ろうと努めた。しかし、単語の意味がわかって、文章全体として何が言いたいのかピンとこないことが多々あった。ちゃんと理解出来ているかを測る方法として、イタリア語を読んだ時にそこに描かれている情景がイメージ出来るかどうかというのがあると思うのだが、小説を読み始めた頃、私の頭には何のイメージも浮かんでこないか、浮かんだとしても、とてもぼんやりしたものだった。

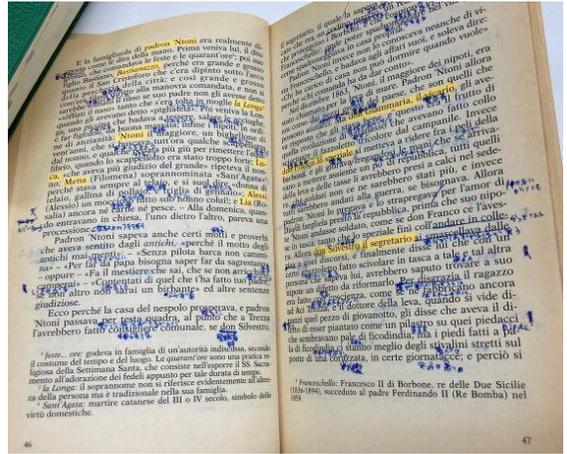
例えば、小説の舞台となったシチリア島東側に

ある小さな漁村アーチ・トレツツアの海岸。今ならパソコンかスマホで検索してどんなところか確認出来るが、当時はインターネットが普及していなかった。イタリア語を頼りに想像したものだ。その後、実際にシチリア島を訪れ、メッシーナからカターニャまで列車で移動した際にアーチ・トレツツアを通して答え合わせをすることが出来た。

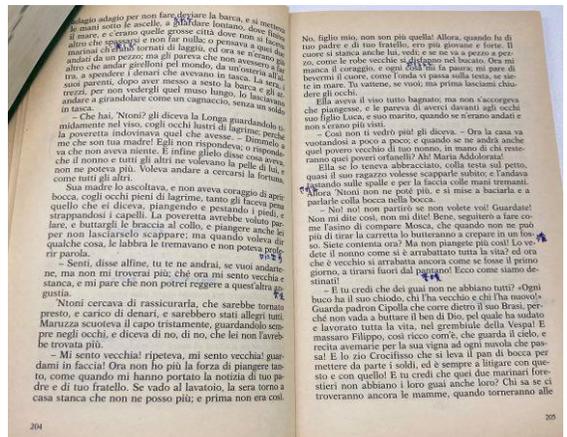
ぼんやりしたイメージのまま、ともかく小説を読み進めた。どれくらい読んだ頃だったか、おそらく三分の一か半分くらい読んだ頃から、自分のイタリア語力が上達しつつあることを実感し始めた。もちろん、物語の背景がわかってきたことも関係あったと思うが、辞書で調べる単語の数はどんどん少なくなった。最初の頃は1ページを読み終えるのに5~6時間もかかっていたものが、最後の方では1日で20ページほど読み進めることができるようになった。特に暗記作業をすることなく、小説を読んだだけで語彙量が増えた。といっても、これで大学の講義もついていけるというほど甘くはなく、1割以下だった聞き取りが2割くらいになったかなという程度だったが、たくさん読むことによる効果を実感した。

イタリア語はほぼローマ字読みの発音なので、同じ5つの母音を持つ日本語話者にとっては聞き取りやすい言語である。イタリア語を聞いた時に知らない単語が混じっていても、スペルの見当がつくのですぐに調べることが出来るのがイタリア語のいいところだ。とは言っても、8割聞き取れないとなると流石にお手上げなので、やはり語彙を増やすことは必須だと思う。

授業をしていると、「覚えられない」「すぐに忘れてしまう」と嘆く声をよく聞く。イタリア語に限らず、何事も使わなくなると忘れてしまう。逆に使い続けられれば、覚えようとしなくても覚える。昔、ある英語通訳の大先輩が、朝晩の歯磨きみたいに、毎日しないと気持ち悪いレベルまでその言語の学習を習慣付けられれば間違いなく上達すると励ましてくれたことがあるが、それくらいにイタリア語に触れ続けることが大切なのだと思う。「読む」「聞く」「書く」「話す」、どんな風に触れるかは、その時に出来ることで構わないし、どの勉強方法が向いているかは人それぞれだと思う。私の勉強方法がどなたかの参考になれば嬉しい。



【書き込みいっぱい】の前半ページ】



【ほとんど書き込み不要となった後半ページ】

(当館語学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: http://italiakaikan.jp/